



No. 67

2009年3月発行

新潟県支部報

マイスコープ

鳥屋野潟公園にベニヒワ飛来

新潟市 本田茂夫 岡田成弘



ベニヒワのオス(右)とマヒワ
2009年1月21日 本田茂夫 撮影

降雪の続く1月下旬、新潟市鳥屋野潟公園にマヒワの群れに混じて雄雌各1羽が飛来し、ハンノキの実をついばんでいました。



ベニヒワのメス
2009年1月24日
岡田成弘 撮影

トキの野生復帰について

佐渡市 深井 真由美（環境省佐渡自然保護官事務所自然保護官補佐）

1. はじめに

2008年9月25日10時35分、約1年にわたる野生順化訓練を終えたトキ10羽が試験的に放鳥されました。佐渡の空にトキがはばたくのは27年ぶりのことです。2009年3月15日現在、放鳥された10羽のうち8羽の生息を確認しており（5羽が佐渡、3羽が本州）、1羽が死亡、1羽が放鳥直後から未確認となっています。

トキの野生復帰の実現には、放鳥後のトキのモニタリングを通じて、これまで不足しているトキの基本的な行動・生態情報を踏まえて、地域の理解や協力を得ながら生息環境の整備を図ることが不可欠です。今回は、放鳥トキの状況、トキのモニタリングの仕組み、さらには合意形成の重要性について紹介します。

2. トキのモニタリング

(1) 意義

佐渡におけるトキの野生復帰は、人と自然が共生する社会を目指して2015年頃に小佐渡東部地域に60羽のトキの定着を目標としています。第1回目の放鳥を行った2008年から2015年までの概ね中間点である2011年までを初期の放鳥段階と位置付け、この間にトキの放鳥技術等を確立し、望ましい生息環境、社会環境について地域住民、研究者、関係行政機関等の共通認識の醸成を図ることとしています。

このため、放鳥後のトキの基本的な生態、生息環境、社会環境の状況に関する各種調査・モニタリングを継続し、フィードバックしていく順応的な管理を行うこととしています。



図1. 赤玉山中にて稲刈り後の水田へ降りるトキ

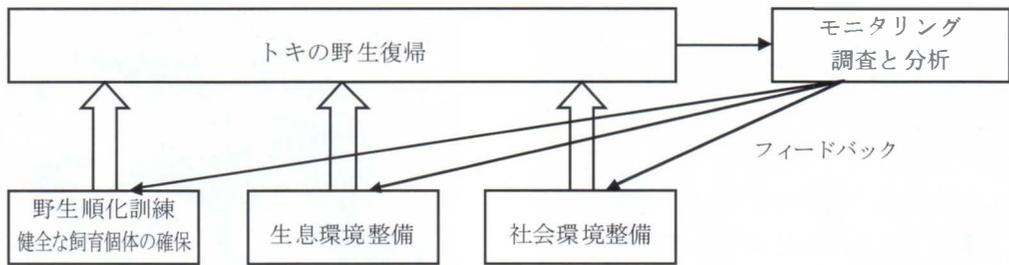


図2. トキ野生復帰の基本的な考え方（概念）

特に、トキの基本的な生態については、例えばトキが頻繁に利用する圃場を分析し、費用対効果の高い手法や技術の確立等、自然再生をより効果的に進める上でも不可欠な情報であり、トキのモニタリングが担うべき役割は大きいと言えます。

(2) 情報の収集

放鳥後のトキの情報収集は地上追跡及び衛星追跡により毎日実施しています。地上追跡はトキモニタリング専門チーム（環境省、佐渡トキ保護センター、鳥獣保護員、研究者等）による観察と一般市民から寄せられる情報をもとに行っています。地上追跡に当たっては、トキと十分な距離を取り、基本的に車中から観察や記録を行っています。衛星追跡では、個体への影響等を考慮して10羽のうち6羽のトキに約30gのGPS送信器を装着し、人工衛星経由で位置情報を収集しています。

(3) 情報の取りまとめとその発信

トキの情報は、毎日、モニタリング終了後、佐渡市トキ交流会館にて取りまとめています。取りまとめはモニタリングに携わる関係者だけではなく、多くの市民も参加しています。その他、市民からFAXやインターネットを通じて寄せられる目撃情報も多く、このように市民のアクセスが容易なトキ交流会館でモニタリング情報が一元化され、地域が一体となったモニタリングが行われています。また、当所では毎日、放鳥トキ情報をホームページ上（<http://ibis-info.blog.ocn.ne.jp/diary/>）に公開し、トキ野生復帰に係る普及啓発にも力を注いでいます。

(4) 放鳥後のトキの概況

佐渡の5羽のうち3羽は放鳥場所の西へ10km程度の範囲に、2羽は放鳥場所より20km程度離れた地域に生息しています。

これら5羽については、行動範囲が落ち着き、採餌行動や飛翔に異常は見られておらず、自然環境下への順化が進んでいると思われます。

また、2009年1月下旬より生殖羽の着色もほとんどの個体で確認されています。本州側の3羽については、まず、最初に一羽が昨年11月8日に放鳥場所から約100km離れた本州側の新潟県関川村で確認され、その後、12月から新潟県内を南下し、3月15日現在、魚沼市にて確認されています。また、残りの二羽については、3月の初旬に相次いで佐渡

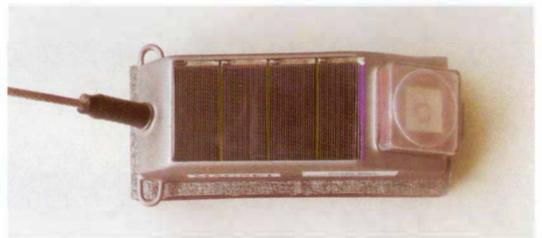


図3. GPS送信器（ソーラータイプ）



図4. GPS送信器（バッテリータイプ）

から本州側へ飛翔し、3月15日現在、胎内市及び村上市でそれぞれ確認されています。

(5) 放鳥後のトキの主な行動

放鳥後のトキは餌場として刈り取り後の田んぼを最もよく利用しています。水たまりやぬかるんだところでは、ドジョウ、ミミズ、カエル類などを、比較的乾燥しているところでは、稲株で越冬する昆虫類を捕食する様子が観察されています。また、厳冬期でも凍結せず流れのある水路や江に沿って歩きながら餌を探す様子も確認されています。小さな餌は捕らえてからすぐに飲み込んでしまうため、識別が難しいですが、ドジョウやカエル類、イモリなど大きな餌については、くちばしでくわえ、振りまわす様子などがスコープで確認されています。

トキがよく利用する田んぼの状態としては、全面的に水を張っている深水田んぼではなく、上述したような水たまりやぬかるみのある田



図5. トキの主な餌① (ドジョウ)



図6. トキの主な餌② (ミミズ)



図7. トキの主な餌③ (カエル類)

んぼが好まれているようです。

また、環境保全型農業の推進等により、田んぼに多様な生物が生息できるような環境を整えていくことも重要ですが、例えば魚道の設置によって田んぼと小川、さらには小川と河川の連続性を確保する取組も重要です。

とまり木としては、アカマツなどの針葉樹以外にも、コナラやキリなどの落葉広葉樹、スタジイのような常緑広葉樹などさまざまな樹種が選ばれています。樹種による好みというよりは、樹木の立地や樹形などで選ばれている傾向が強いと考えられます。また、かなり細い枝、枯れ木、電線や民家のテレビのアンテナへの止まり、さらには交通量の多い道路に面した木への止まりなど新しい知見も得られつつあります。

4月以降、佐渡は観光シーズンとなり、稲作も行われます。そのような状況下におけるトキの行動や餌場の環境について、今後も引き続き注意深く観察していく必要があります。



図8. 羽茂川流域で枯れ木にとまるトキ

3. 合意形成の重要性

トキの野生復帰の取組を進めるにあたっては、地域住民、NPO、研究者、関係行政機関等地域の多様な主体の参画と連携の視点が重要です。このため、情報共有を図ること等を目的に「人・トキの共生の島づくり協議会（事務局：佐渡市）」が2007年3月に発足しました。

一方、地元住民、関係行政機関、研究者等が連携したワークショップ形式の談義所活動も島内各地で数多く行われています。

談義の内容は、トキだけにとどまるものではなく、農業、漁業、流域の自然再生、集落の維持、環境教育と多岐にわたります。

例えば、小中学校では「トキになって一言」、集落では「地域の恵みをどう活かすか？」など、テーマを決めて参加者全員で談義を行っています。この活動では互いの考えや悩みを共有し、今後どのような方向を目指して具体的に行動すればよいのかということを「批判」ではなく、参加者一人一人が「提案」しながら談義を進めていることが大きな特徴です。

トキを生物学的に定着させていくことはもちろん重要です。一方、トキをきっかけに

地域の将来について地域住民の方々自身が考え、トキを社会的にも定着させていくことは、「人と自然が共生する地域社会」を目指す佐渡にとって最も重要なことと言えるのではないのでしょうか。現在佐渡では、トキの放鳥を機にさまざまな取組や地域間の新たな交流も生まれつつあります。

今後とも、トキの野生復帰に向けて、皆様の一層のご支援とご協力をお願い致します。



図10. 漁業関係者との現地調査
(写真提供：東京工業大学)



図9. 農業関係者との談義
(写真提供：東京工業大学)



図11. 地元小学校への出前授業
(写真提供：東京工業大学)



高病原性鳥インフルエンザと野鳥の関与

新潟市 小野島 学（下越家畜保健衛生所 獣医師）

1 はじめに

近年、高病原性鳥インフルエンザウイルスが鶏に猛威を振るい、その感染に野鳥の関与が示唆されていることから、今までの発生状況を確認し、今後の野鳥との関わりについて考えてみたい。

2 高病原性鳥インフルエンザとは

一般に鳥インフルエンザは、鳥類がA型インフルエンザウイルスに感染して起こる病気で、本来ガン・カモ類の水鳥を中心に伝播し、ほとんど症状を示さない。このウイルスが家禽（鶏、アヒル、七面鳥、ウズラ等の家畜化した鳥）に伝播しても病原性は少ないが、家禽の間で感染を繰り返すことにより、急性に下痢、呼吸器症状、神経症状などを伴う死亡率の高い病原性を示す型（H5、H7）に変異することがあり、これを「高病原性鳥インフルエンザ」として家畜法定伝染病に指定し、病原性の低い「鳥インフルエンザ」と区分している。

3 高病原性鳥インフルエンザの発生状況

家禽における高病原性鳥インフルエンザは、家禽ペストとして1878年にイタリアで初めて報告された。その後各国で発生報告があるが、近年では2001年から香港、マカオ、韓国で発生が確認され、東南アジアを中心に大規模な流行がみられた。2002年にはアメリカ、イタリアで、2003年からオランダ、ベルギー、デンマークなどのヨーロッパで、2004年にはアフリカへと拡大し、世界規模の流行となった。国内では1925年に本県などに発生の記録があり、その後79年ぶりの2004年1～2月に山口県、大分県及び京都府の鶏に発生して以降、2005年6月～2006年1月に茨城県及び埼玉県、2007年1月～2月に宮崎県及び岡山県で発生し、2009年2月末から愛知県でウズラに発生が

確認され、養鶏産業に多大な損害を与えている。

人への感染は日本では報告はなく、鶏卵や鶏肉を食べても感染することはない。また、本病が家禽に発生した場合は、発生農場を中心とした半径5～13Kmの区域にある農場の生産物は、ウイルス検査陰性でないとは出荷できなくなるため、ウイルス汚染鶏卵や鶏肉が市場に出回ることはない。なお、ウイルスは強酸や強アルカリに弱く、ウイルスの表面がエンベロープと呼ばれる壊れやすい膜で覆われているため市販のほとんどの消毒薬に効果があり、適切な加熱（70℃以上、1秒）により死滅する。しかし、家の中で高密度に鶏や水鳥と接触している東南アジアの地域、生きたカモ類その他の野鳥と家禽を同じ場所で売買している中国等の生鳥市場では、希に人に感染し死亡した例が報告されており、今後このウイルスが、人から人へ感染する新型インフルエンザウイルスの発生につながり、パンデミック（世界的な流行）が起こることを危惧している。

4 野鳥での発生状況

野鳥特に水鳥は、高病原性鳥インフルエンザウイルスに対し抵抗性があると思われていたが、2005年4～6月に渡り鳥の世界的繁殖地である中国の青海湖で6,000羽以上の野鳥（インドガン、オオズグロカモメ、チャガシラカモメ、カワウ等）が死亡したこと、同年8月にモンゴル北部でオオハクチョウ、ロシアのシベリヤ地域でカモ類やワタリガラスなどの渡り鳥が大量死したことが確認され、それ以降アジア、ヨーロッパ地域でガンやハクチョウ（コブハクチョウ）などの感染が報告されたことにより、本ウイルスが野鳥に高い病原性を与えることが確認された。

国内の野鳥の感染は、2004年に京都府で

ハシブトガラス 9 例、2007 年に熊本県で衰弱死したクマタカ 1 例、2008 年に秋田県、青森県及び北海道で死亡又は衰弱したオオハクチョウ 5 例からウイルスが確認されている。ハシブトガラスは近くの養鶏場で発生し死亡した鶏を捕食した二次感染と考えられ、クマタカも留鳥で行動範囲が 5～20km と広く、同時期に約 70km 離れた隣県の宮崎県で本病が発生していることから、九州地域でウイルスに感染した鳥類や哺乳類を捕食して感染したことが考えられる。またオオハクチョウは北帰行の途中で感染したことが考えられるが、感染経路は不明である。

5 ウイルスの伝播経路

2004 年及び 2007 年の西日本で鶏に発生した高病原性鳥インフルエンザは、いずれも発生前に韓国で流行がみられ、ウイルス遺伝子の比較解析の結果から、韓国で分離されたウイルスと国内のウイルスがきわめて近縁であることが明らかになっている。2007 年のクマタカから分離されたウイルスも同年韓国、宮崎県及び岡山県で分離されたウイルスと近縁であり、さらに 2005 年以降広範囲に広がっている中国青海湖タイプのウイルスであることが判明した。2008 年のオオハクチョウの分離ウイルスも、前年又は同年に中国、韓国で発生したウイルスと非常に近縁であった。感染経路として、疫学的な調査で中国や韓国からの人や鶏及び関係物資の移動による伝播は考えられないこと、いずれも冬季の感染であったことから、大陸からの渡り鳥がウイルスの伝播に関わっていることが考えられている。大陸から西日本への冬鳥の渡りルートは、中国東北部から朝鮮半島を經由して飛来するルートの他に、日本海を直接渡ってくるルートが考えられる。また、水鳥及び渡りの鳥類が直接鶏舎内に侵入する可

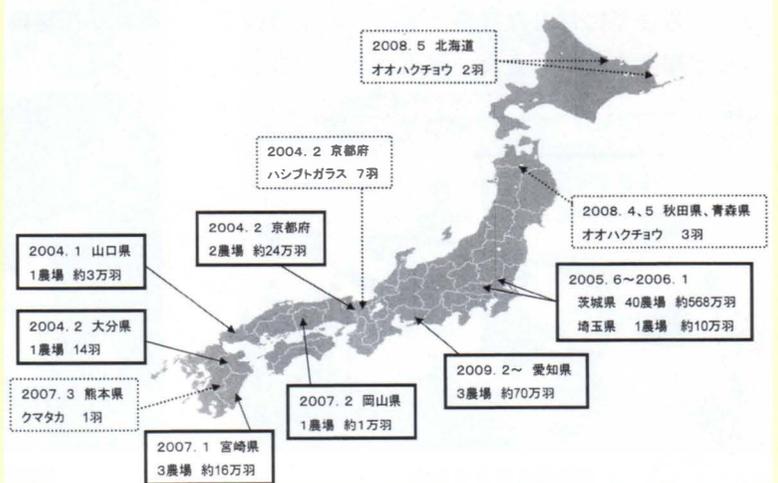
能性は低く、比較的鶏舎に入りやすいスズメ、ムクドリ、ドバト等の留鳥又はネズミ等の小型哺乳類を介して感染することが考えられている。

6 野鳥との関わり方

我々は野鳥観察、調査及び研究を通して野鳥と間接又は直接的に接触する機会が多くある。しかし、鳥インフルエンザが社会問題となり、野鳥との距離を少し置いて観察されるようになった所もある。人工給餌を行っている湖沼では多くのハクチョウ、カモ類が間近かに観察されることから、一般市民、観光客を和ませてくれるが、網を設置するなど直接触れることがないよう配慮されている。高病原性鳥インフルエンザをむやみに恐れる必要はないが、野鳥はウイルスに限らず、サルモネラ、クラミジア、寄生虫など人体に害を及ぼす危険性のある病原体を持っている場合もあり、野鳥の死体は素手で触れない、触れた場合は石鹸で手指の洗浄をするなど、今までと同様に一般的な衛生対策が重要。カモ類の糞から病原体が付着する可能性もあり、手洗だけでなく靴底の洗浄にも配慮が必要である。

今後も、野鳥の保全、共存を守るため野鳥と人が適切な距離を保って行くことが大切と考えられる。

高病原性鳥インフルエンザ確認事例



新潟南高校「トキ復帰プロジェクト研修」について

新潟市 伊藤大助（新潟南高校 教諭）

本校は、平成15年度に文部科学省からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けました。SSHに指定されると、国の予算を得て科学分野における教育プログラムの研究開発を行います。指定後5年間研究開発に取り組み、一定の成果をあげることができました。その結果、平成20年度からさらに5年間の指定を受けることになりました。SSHも第Ⅱ期に入り、あらたに「環日本海環境プロジェクト」をたちあげました。このプロジェクトは、環境測定をしたり環境問題について調べたりして環境に対する意識を高めるとともに、日本海を囲む国々の高校生と環境問題について意見を交換し、交流を深め国際性を身につけることを目的としています。また、子どもたちが将来、プロジェクトで学んだことを生かし、交流した国々の人たちと協力して地球温暖化などの環境問題の解決を図ることへの期待もあります。前置きが長くなりましたが、この「環日本海環境プロジェクト」の活動として平成20年7月29日～31日に「トキ復帰プロジェクト研修」を行いました。高校生たちは“トキ”という名前は誰でも知っていますが、トキがどんな鳥で、どんな生態で、日本に野生のトキがいなくなるまでにどんな経緯があったのかはほとんど知りません。また、最近ではトキの野生

復帰に関するニュースが頻繁に流れますが、実際にどんな活動がなされ、どんな苦労があるのかもわかりません。私たちは、そんな子どもたちに「トキ復帰プロジェクト研修」を通して、環境問題について考えさせるとともに、失った自然を取り戻すことがいかに大変かを単に知識として知るだけでなく、体験することでしっかり身につけて欲しいと企画しました。

研修は、新潟大学准教授の本間航介先生、教育支援員の関谷国男先生からの御指導のもと、佐渡のトキ交流会館と新穂キセン城のトキ野生復帰のために整備されているビオトープで2泊3日の日程で行われました。

初日は、最初に本間先生から「トキ復帰プロジェクト」について講義を受けた後、会館わきの水田で生物調査の実習を行いました。水田にはいり、網で2、3回泥ごとすくうと、いろいろな生物が採集できることに生徒たちは一様に驚いていました。その後、採集した生物を会館に持ち帰り、生物の同定を行いました。生徒たちは、自然に触れる機会があまりないため、見たことのない生物をあれこれ図鑑と見比べながら夢中になって調べていました。夜には再び本間先生から野生のトキが絶滅した経緯や里山の環境などについて講義を受けました。



本間先生による講義



佐渡市新穂キセン城のビオトープ

2日目は朝から佐渡市新穂キセン城へ移動です。車は砂利の細い道をどんどん登っていきます。生徒たちは、どこに連れて行かれるのかと不安の面もちでした。やがて、昔は棚田で今はトキ野生復帰のためのビオトープとして整備している場所に到着しました。最初に、たくさんあるビオトープを見て回り本間先生から説明を受けました。その後、グループに分かれ担当のビオトープで前日と同じように生物調査を開始しました。前日よりはるかに多くの生物が採集できました。生徒たちは、多くの生物を育む自然の豊かさを身にしみて実感しました。

午後からは、ビオトープの整備作業です。常に人が整備しないとトキのエサ場として最適の状態は保てません。生徒たちは足のぬかるむビオトープに入り、整備作業に取り組みました。整備作業は重労働でしたが、生徒たちは疲れも見せず頑張りました。一段落着くと、昔トキ保護センターのあった場所へ向かいました。30分ほど登っていき、最後に土手をあがると眼前に池と旧トキ保護センター跡地の風景が広がっています。生徒たちは口々に「やべー、やべー」（すごいの意味）を連発していました。眼前に広がる風景は生徒たちにとって今まで見たことのない、感じたことのない風景だったようで、ただただその雄大な自然に圧倒され感動していました。

3日目は、午前中にトキ保護センターやトキの野生復帰のための施設、それからトキ放鳥予定地を見学しました。2泊3日の短期間の研修でしたが、生徒たちにとっては充実した研修になったようでした。帰る頃には生徒同士でトキの野生復帰について議論する様子も見ら



ビオトープの整備作業

れました。野生復帰への関心が高まるとともに将来は自分たちが考えていかなくはいけないという自覚も出てきたようで頼もしく思いました。

自然と触れ合う機会の少なくなっている子どもたちに、自然保護や環境問題について関心を持ってもらうとともに、将来それらの問題を担ってもらうためには、まず子どもたち自身が自然の中に飛び込み、自然を全身で感じる必要があります。今回の研修を行い、子どもたちの様子を見るにつけ改めてそのことを実感しました。

今後もこのような研修を継続していきたいと思えます。



生徒たちが感動した風景

新潟県内でのコシアカツバメの繁殖状況

新潟市 伊藤 浩

昨年、新潟県の鳥類目録の編集作業をおこなっていた際に、近年コシアカツバメの繁殖は減少しているのではとか、かつて繁殖したとの記載がある所では現在どうなのか、また、その数は減っているのか、などが話題となり、その後、いくつかの場所に足を運んでみることにした。

以前、厳冬期の探鳥会の集合場所として使っていた、旧寺泊町の町民体育館の2階のヒサシには沢山の巣が並び、時期になると隣のマンションとの間を多くのコシアカツバメが飛び交っていたが、屋根の改修の際にヒサシが金属板で塞がれ、その後は一時的に姿が見られなかった。



寺泊体育館の、昨年の巣

野積地域の道路沿いの食料品店の軒先に作られた巣でも、店の改修の影響か、前を通っても見かけなくなり、しばらく寺泊付近でコシアカツバメを見る機会がなかった。

その後、同じく厳冬期の探鳥会で利用している、出雲崎漁港にある漁協の事務所2階のヒサシに10数個の巣が見られ、夏に数番の営巣を確認していた。この地域は周囲の山が海岸線の側まで迫り、古くからの町並みが細く連なっている。屋根の上には多くのツバメも盛んに飛び交っており、その中からコシアカツバメを探すのは、なかなか楽しかった。

このコシアカツバメは、11月に訪れた際にも観察され、越冬するのかと勘違いをしたこともあった。出雲崎港で期待した鳥が少なかった探鳥会の際には、コシアカツバメの話を活用させてもらった。

コシアカツバメは、入り口の細長いとっくり型の天井に張り付いた巣を作るが、その入り口付近が脱落し、お椀型になっているものが数多く目立っていた。その巣からはワラなどがとび出して見え、スズメなどに占領されたようで、その後に手直しをして使う様子は見られない。次第に営巣する数も減り、昨年はその場所ではあまり姿をみかけなくなった。

そこで、周辺の建築物での営巣を探していたところ、近くにある天領の里という道の駅の物産館の駐車場でコシアカツバメを見かけた。物産館の周囲を探してみると作りかけや、土が付いた壁などを見つけた。事務所の出入り口付近の真上に巣をかけ始めたため、早いうちに落としたようである。しかし、そこが気に入ったのか、少し油断している隙にすぐその脇にまた巣を作ったようで、今度はそのままにしてあるとのことであった。事務所の人たちは、ただ普通のツバメが巣を作りはじ



スズメが物色中

めたというだけの認識だったので、出雲崎町でもあまり見かけなくなったコシアカツバメだということを少し強調して話してきた。

この場所は海からの強い風が建物を巻き込むように吹いている2階の屋根近くに2カ所の巣があり、風を避けるように細長いとっくり型の入り口がそれぞれ左右に曲がって作られている。今年の寺泊の探鳥会では、この巣を紹介して、独特の形の巣を観察してもらった。

以前多くが繁殖していた旧寺泊体育館では、2階のヒサシは使えないため、近年1階のヒサシを利用して少数が営巣している。元の場所に帰って渡ってきたコシアカツバメが、それらの近い所でなんとか利用できる場所を探して営巣しているのかと感じている。

村上市では、以前から上海府小学校近くの公民館での繁殖を確認しているが、昨年も少数が巣作りをしていた。ここも海に近い鉄筋の建物で2階のヒサシ裏に営巣している。や

はり入り口が落ち、ワラなどが見えている巣も多い。コシアカツバメが出入りしている巣は、細長い入り口はまだ土も乾かず産座と色の違いがはっきりしているものや、まだ産座だけでこれから入り口を作る所のものがあった。

昨年には瀬波温泉地域内での営巣の観察があったとの情報もあった。

佐渡では、近年は小木や相川で繁殖が確認され、フェリーの乗り場の建物やホテルを利用して営巣しているようだ。

以前に繁殖があったとされていた記載について、現在の状況を確認するため幾つかの場所を観てきたがいずれも数は多くはなく、今後のさらなる減少が心配な状況であった。

柏崎市では、以前から大きな集団繁殖地があるそうなので、今年はぜひ訪れてみたい。

上越地域や他の地域の繁殖状況についてもこれから観ていきたいので、情報をお持ちの方は、ぜひ教えていただきたい。

新潟県内のツバメ類を調べた古い調査が記載されている記事を見かけたが、残念ながらツバメとコシアカツバメを分けての記録はなされておらず、そこでも今後の課題とされていた。海岸線が長い新潟県では、多くの場所でコシアカツバメが繁殖していると考えられるが、今後の生息数や密度の変化には注意が必要であろう。以前から市街地の人工物で繁殖し、増加していたイワツバメも、この頃はその数が減ってきた気がする。今後も、少しずつ変わる鳥の世界を見続けていきたいと思っている。



天領の里の、入り口が途中で曲がった巣



同じく天領の里の、最初から入り口は横に



巣を補修中のコシアカツバメ (村上市)

阿賀町 角神・赤崎山探鳥会

魚沼市 桑原優子

探鳥会の前日、宿につくなりすぐ近くでさえずっているホトトギスとウグイスに驚かされました。阿賀町での探鳥会は初めてだったので、今まで見たことの無い鳥が見られるのを楽しみにしていましたが、夜まで雨が降り続き翌日の天気心配されました。

当日早朝は雨が上がったものの霧が出ていて視界が悪く、スコープも必要ないと思うほどでした。

マイクロバスで10分程行った所から探鳥会を開始し、赤崎山頂上を目指して歩き始めました。前日が雨だったせいか、あまり盛んにさえずってはくれませんでした。イカルやツツドリ、またアカショウビンの声も聞こえました。

山頂からは、近くのアオサギを中心とするサギのコロニーや、ヒガラなどがよく観察されました。ヒガラはすぐ近くの木の枝先に止まってくれて、きれいな声でしばらくさえずりながらかわいい姿をよく見せてくれました。また山頂からはヤマセシも見られたようですが、私は見る事が出来ず残念でした。

山を降りていく途中では、梢でさえずるクログミや、鳴きながら飛ぶサンショウクイなどがよく観察され、全部で39種類の野鳥が観察されました。

前夜の研修会で渡部通さんがクマタカについて



て興味深い発表をされ、クマタカへの期待が高まっていたのですが、残念ながらタイミングが合わずほとんどの方が見る事が出来ませんでした。

野鳥についてもさることながら、野草や木々などについても非常に詳しい方がたくさんいらっしゃって、野鳥を探しながらもいろいろな自然の勉強が出来ました。

今回の探鳥会ではあいにくの霧もあり、なかなか姿も見にくかったですが、多くの種類を観察できよかったです。今度は是非クマタカに会いに来たいと思います。

この探鳥会は昨年6月1日に開催されたものです。紙面の関係で前号に載せることができませんでした。お詫びいたします。編集部

発行 2009年3月31日 No.67

発行人 大島 基 編集者 小林成光、浦部良雄、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒950-0941 新潟市女池3丁目13番25号

TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002